

せせがむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
— 第三号 —

平成二年一月一日

古平町の地名

近藤 芳二

もっていた旅行者や探検家は、このエキゾチックな地名を平仮名で記録していた。その後明治の初期から和人の定住が盛んになり、アイヌ語地名を漢字で書くようになった。

古平町の地名のはじまりはすべて、アイヌ語で表現されていた。これは古平町だけでなく、北海道の地名は、道南の一部を除きすべてアイヌ語である。従って、アイヌ語を理解しない和人はその地名の意味が分からない。

幕末のころから、和人の進出と共にアイヌ語に興味や関心をもち、アイヌ語地名を仮名で書くとなると、若干のなまりはどうしようもなかった。これをこんどは漢字で書くとなると、なかなか音と漢字が一致しない。そこで、音に似た漢字をむりに当てはめて、それを普通の漢字の読み方をするわけである。従って漢字名でアイヌ語地名の原形を知ろうとしても無理である。

過去の旅行者、研究者の書き残したその記録とその地形や、土地の歴史などとの関係からアイヌ語地名の原形に迫り、古平の地名を整理してみたい。

●古平のアイヌ語地名について

古平町は歴史的に古い土地であるために、地名の原形をたどることはなかなか困難である。しかし、現在の地名を分類すると、次の三点にまとめることができる。

- ① アイヌ地名と全く関係ない地名 例（栄町・港町）
 - ② アイヌ語を土台にして漢字で書かれた地名 例（歌葉町・群来町）
 - ③ アイヌ語のままの地名 例（チヨベタン）
- アイヌ語を記録した旅行者や研究者

古平地方のアイヌ語地名を記録した第一人者は、幕末の探検家松浦武四郎である。彼は、北海道を六回探検しているうち、二回積丹地方を陸路で通って

る。その時の記録として、次の二点がある。

- ・再航えぞ日誌（一八四六）
- ・東西えぞ山川地理取調紀行（西えぞ日誌）

ほかにも資料がいくつかありますが、省略します。

一、群来町 へロカルウス 最も美国寄りの地名である。同名は、にしん漁のあった各地の沿岸にある。

松浦日誌（弘化三年）へロカルウス、永田地名解（明治二十四年）では、へロックカルシ「にしん場・往時ヨリにしんノ群来ル所ナリ、今、群来村ト称ス」とある。

これは、「にしんを・取る・いつも・する・ところ」を訳して、つめてよんだ形になっている。

（古平小学校・教諭）

以下次号

碩 草

平成二年 元旦

古平町史編纂委員会

委員長 越中 庄司



故郷を想ひ

福井 幸平

最近、すっかり消えてしまつた遊びに、へたなばた祭りがある。たなばたの夜町内のグループ五、六人で、柳の枝に金銀やいろんな色の色紙をつけ、それに、缶詰の空缶に穴をあけてろうそくを立ててたちょうちんを下げ、さまざまなメンコをかぶつて軒並み歩く、楽しみな遊びであつた。

「今年豊年たなばた祭りよ

オーイヤ イヤヨ

ローソク出せ 出せよ

………

と、叫びながら、ろうそく、小銭、お菓子などを頂いては楽しんでんだ。

こんな素朴な子どもの楽しみをとつたのは誰か？ 旅から来たある先生が、

「そんないやしい、ほいどのよ
ような真似をするな！」

と、指導したそうで残念でならない。古くから続いてきた大切な文化の根を断ち切つた先生は誤りであると思う。

もし、そのはやし言葉に問題があるなら、自分が先頭に立つても言葉を改めるなり、お金を頂くのが悪ければ、父母と相談して、別な方法もあつたのではないか。何としても残念なことである。

前浜の想ひ出

まえ
ばま

伊藤 玉一

師走も近くなり、走馬灯のように六十余年が甦つてきて、ペンを走らせることにいたしました。

前浜は、自分たちが生まれ育つた港町の浜です。当時の幾井さんの前の浜は、ガンゼ・アワビがあつて、僕たちの遊び場所でした。

当時は鱈場の若い衆が大勢来

その当時は、大きなお祭りが二つと、あとはあちこちに神社があつて、そこでは必ず相撲をやつた。私もまた必ずそこに行つた。そして、沢山の景品を頂いてはそれが得意であつた。

青年が中心だつたり、子どもが中心だつた時代があつたが、町の景気の具合によつて、そのスポンサーも違つてたようだ。

—以下次号—

て、雪割りをしては船を出していましたので、僕たちはその付近や船の中で、ボール遊びやパッチをやつて楽しんでいたが、僕は負ける方が多かつた。

大正十五年四月が、僕たち一年生の入学日で、薄氷の道路をバリバリと鳴らして登校する。教室に入ると、受け持ちの先生が入ってきました。袴姿の女の先生（宮本恵先生）です。

「ハナ ハト マメ マス」の読み方から習ひ始めました。

やがて、春の運動会も近くなり、僕たちは、へ足柄山の金太郎の遊戯の練習に入りまし

△7月の山来市

■浜町・館岡重助沖村山中で熊三頭を射止める（昭和七年）

■大政翼賛会古平支部が結成される（一五年）

■町内青年団が統合して古平青年団を結成する（一六年）

■積丹地方開発振興会が設立される（二三年）

■古平町道路愛護組合が設立される（二四年）

■古平漁業協同組合の事務所と市場が完成する（二五年）

■青年団体主催「町議立候補者の抱負を聞く会」（二六年）

■明和小学校落成・創立四十周年記念式典を挙行（同年）

■古平漁業会が法定解散をする（二七年）

■都市計画により西部地区の大字・地番が変わる（三一年）

■すけそ刺網漁船、藤洋丸転覆三名が行方不明（三二年）

■暴風雪で漁船に被害、防波堤の一部決壊する（三四年）

■古平商工会が第三日曜日を休

新年

十二月下旬になると、

正月の準備に忙しくなってくる。戦前とは生活の様式も変わってしまったが、このような年中行事は伝統的なものであり、

古平の正月風景を振りかえってみたい。

●大掃除 「すすはらい」から始まる。これは主婦の仕事として、普段あまり手をかけない神棚、仏壇などを掃除してほこりを払い、身辺をきれいにして新年を迎えようとするのである。
●餅つき 餅つきは日を選び、二十九日は苦（九）といって嫌った。何軒か共同でやり男が杵をもち、女があいどりをした。なかには酒を酌み三味線のお囃子をいれて、賑やかに餅つきを祝うところもあった。餅はまずお供えにし、あとは切り餅にして、雑煮や黄粉餅などお正月のご馳走であった。

●門松 とど松の枝にゆずり葉を添え根元を紙で巻いて、紙で折った雄蝶・雌蝶を水引きでし

ばり、玄関の両側へ釘で打ち付けた。その間に昆布やするめの切ったものと、ゆずり葉を挟んだしめ縄（注連縄）を張った。

●内飾り 床の間に掛け軸を掛け、ゆずり葉を挟んだ鏡餅の上

にみかんや干柿をのせ供えた。漁場主の所では、床の間に『天照皇大神』その両側には、『恵比須』『大黒』の掛け軸を掛け僧侶に祈禱をしてもらったという。（④山口漁場）

●しめ飾り しめ飾りを神棚に飾ったほか、倉庫（納屋）や船（農具）などにもこれを飾ったが、これらのお飾りは戸主の仕事として行われ、家によつては火の神（いろり、ストーブ）、水の神（井戸、台所）にもお供えやお飾りをした。

年代ははっきりしないが、古平川の川水を利用していた人たち（沢江町や浜町土場で働いていた人）が、正月の準備をするこの頃に、川水の汲み場に ※

た。女生徒と手をつなぐことになって大いに照れたことが思い出されます。当時の運動会は、本陣の干場といつて（宝海寺前の漁粕類の干す所）魚臭のプンプンする会場で、遠くに積丹岳の残雪も眺められる所でした。手をつないだ女生徒は誰であったのだろうか――。

徒競走では、とうとう卒業までいつも入賞者の一人か二人後で、ノートや鉛筆をもらったことはありません。

大正十五年十二月二十五日、二期期ももう終わりに近づいた日、大正の時代から昭和元年と変わりました。家では二十八日が僕の誕生日なので、餅つきをしました。

僕たちのクラスは、一年生を二つの時代で学んだわけです。

奇縁――この稿を書くに当たって思ってもみませんでした。八人居る孫の中二人が、祖父ちゃんと同じ体験をしているのです。

昭和九年三月二十二日が僕たちの卒業式の日ですが、その日

日とする (三五年)

■大陽丸チャラセナイ付近で座礁したが全員救助（三七年）

■アメリカ・ライフ誌に古平漁港のすけそ漁紹介（三九年）

■古平剣道連盟結成（四一年）

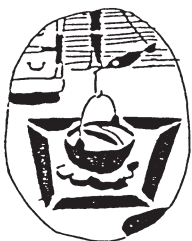
■みなと保育所が落成し入所式を挙行する (四二年)

■古平救難所五十周年記念式典を挙行する (四五年)

■特殊学級親の会・さざなみ会が結成される (四六年)

■七十歳以上の老人医療費が無料となる (四七年)

*昭和四十九年までの主な事項を載せています。



は、あの有名な函館大火の日でした。考えてみると、始めも終わりも敵しいようなことだったので、孫たちには、こんなことのないように祈るばかりです。

つづく――

日誌

名達文吉

十一月三十日、午前六時三十分大阪ステーション発車、七時三十分神戸三ノ宮着車、海岸通り長谷方二休泊ス。
 三十日、十一時共同運輸株式会社越後丸二乗込、神戸湊ヲ出帆、越中国伏木二至、下×方面亦××。
 十二月三日、午前七時馬関寄港、十一時出帆、四日夜ヨリ日

『十一月三十日、午前六時三十分大阪ステーション発車、七時三十分神戸三ノ宮着車、海岸通り長谷方二休泊ス。
 三十日、十一時共同運輸株式会社越後丸二乗込、神戸湊ヲ出帆、越中国伏木二至、下×方面亦××。』

いま手元にある、何気なく残された一枚の文書も、私たちの歴史を語る貴重な財産なのです。

々大雪ニテ地山ヲ不見、六日朝八時頃二越中伏木入港、七日午後一時出立、十四日午後此在地下着ケリ。』

以上で、三回に分け連載しました、名達文吉さんの『日誌』の紹介を終わります。

八月十二日、古平港を出帆して、十二月十四日帰着するまでの旅程が、的確にそして簡潔に書き記されています。用向きの

※ お頭付き、一尺五寸（約四十五センチ）の柳の箸を添えて川水神を祭ったという。

●としとり 三十一日は「年越し」「大みそか」とか言われているが、この日は「としとりをする」と言って、精一杯のご馳走を作り一家の団らんをした。

数の子、黒豆、煮しめ、なますなど縁起物は必ず出したが、鯨汁や新巻などが正月らしい献立であった。

この日に鯨場のおまじないとして、独特のことをする漁場主もあった。△仲谷漁場では、「三角（みかど）喜ぶ時来た



事は何も書かれていませんが、当時、鯨の粕の需要が多かった地方を回り、その販売と販路の拡張が目的であったと聞いています。（名達博さん談）

一冊の文書、たとえ一枚の文書であっても、私たちにあってはそれが貴重な資料です。

資料を提供して頂いたことにお礼を申し上げて終わります。

る。家運長久孫の代まで「ごもつとも ごもつとも」と、年夜の祝い言葉を唱え、ご祝儀として五十銭（女の一日の出面賃に相当）が与えられた。

●元日 早朝に若水を汲むのが戸主の役目であった。まず神仏に供えて一年の無病息災を祈った。その後、一家で飲んで新年の気分を新たにし、また、顔を洗うと色白になるというのでこれ顔を洗った。朝は雑煮だが餅の形（古平では四角い切餅）はほぼ決まっているものの、味つけや中に入れる具は各家庭で違い、出身地によって特色があった。初詣は「ついたち参り」と言うが、初詣がすむまで途中で会った人とは口をきかない、という風習もあった。また初詣の後は、「元日から出歩くものではない」という禁忌もあり、家の中で過ごす人が多かった。

大正末、お寺で新年交礼会が行われた、という記録があります。

*紙面の都合で省略しましたが、この稿を終わります。（町史編さん室 村井芳男）